

異常値から見る検査技師の「これまで」と「これから」

◎山内 露子¹⁾

熊本大学病院¹⁾

臨床化学、免疫化学の分野では標準化が進み、どの施設で検査を行ってもほぼ同等の検査結果を得られることが可能となるとともに、測定試薬の安定性や分析装置の性能が大きく向上したことで検査精度はさらにアップした。しかし、検査精度がどんなに向上しても避けられないのが「異常値」の存在である。「異常値」と一口で言っても、基準範囲を逸脱した異常値、患者の病態を反映しない異常値、また、基準範囲内であってもその患者にとっては異常値である場合もある。

特に患者の病態を反映しない異常値の発生は、分析装置や試薬に起因するものと患者検体に起因するものに大別され、反応過程の確認や単検体での発生か複数検体での発生かを見極めることが重要である。また、それが単項目か複数項目についても確認することで、これらを大凡切り分けることができる。分析装置や試薬に起因する異常値の場合は、手元にある情報や分析装置の状態から原因を探っていく。次に患者検体に起因する異常値の場合は、患者背景や投薬情報等の確認の他にも医師や看護師とのコミュニケーションも重要になってくる。

また、医師から「臨床症状と検査値が合わない」といった問い合わせを受ける場合もある。「今日のコントロール大丈夫だったよね?」「分析装置でトラブル発生?」「他の患者さんのデータは大丈夫?」など一瞬でいろいろなことが頭を駆け巡るが、思いもよらない検査値に遭遇した医師の言葉に冷静に耳を傾け、状況を把握し、問題解決の糸口になりそうな情報を聴取する。

今後、AI等の新しい技術が臨床検査業界に導入されるのは時間の問題であろう。AIの導入により付加価値の付いた検査情報を提供することが可能となる一方で、患者の病態を反映しない異常値の検出なども可能になるかもしれない。しかし、どんなに新しい技術が開発されても人と人のコミュニケーションはなくなることはない。技師同士、技師と他職種の間にも大変重要である。シンポジウムでは、当院の事例を提示しながら、これからの臨床検査技師のあるべき姿を考えてみたい。